

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

ボランティア指導者としての強い気概を！

2月のサッカープランでもご紹介しましたとおり、千葉県郡市トレセン大会は、6年生の部、5年生の部とも、市川市のトレセンチームが上位を占める結果となっております。

特に、6年生の部では、市川FC(市川トレセン)がここ10年でベスト4に入れなかったのは僅かに2度。平成22年度、23年度は連続優勝し、24年度から26年度は連続3位が続いています。また、市川中央支部トレセンは昨年度初優勝し、今年度もベスト4進出をかけた八千代トレセンと戦いましたが、終了間近に同点に追いつかれ、惜しくも得失点差で涙を吞みました。市川北FC(北部支部トレセン)も大きな結果は今のところできていませんが、着実に力をつけてきています。

このような市川市のトレセン活動の豊富さや選手層の厚さに、千葉県の他の地域指導者は驚きを隠せないようです。なぜかと申しますと、数年前から大会要項が変わり、6年生の部は11人制の前後半総入れ替えとなり、最低22名の選手登録が必要となったからです。一つの市が、22名を登録し、前後半を勝ち抜くことだけでも難しいことなのに、市川市はというと、市川FCAB2チーム、市川中央支部トレセン1チーム、市川北FC1チームの計4チーム、登録した選手は実に88名を超えており、しかもそれなりの結果を出しているのです。特に、選手のセレクションを実施している市川FC(市川トレセン)は別として、中央支部や北部支部などの支部トレセンの躍進に、千葉県の他の地域指導者は驚愕しています。

この要因は？と考えてみますと、トレセン指導者のより良い指導法の追究によることも大きいと思いますが、なんとといっても4種委員会に属する各単独チームの指導の賜物だと思います。実際、ここ数年、市川FCセレクションで選ばれた選手とそうでない選手の垣根が低くなってきているように思います。各単独チームの指導が充実し、選手個々に力となって備わっているからこそその状況だと考えています。

市川市内の小学校に入学したり、転校したりしてきた子が、サッカーをやりたいと思ったら、身近に、叶えてくれるサッカークラブがある。しかも、そのクラブの指導者は、自主性を伸ばしつつ、仲間とともにサッカーを上手にしてくれる。そして人として成長させてくれる。

何度もお話しして恐縮ですが、これが市川市の「理想的な姿」と考えています。

市川市では現在、この理想に賛同し、「子ども達の自主性を伸ばし、仲間とともにサッカーを上手にし、人として成長させる」べく、子どもへの接し方や指導法を追究して下さっている方がなんと多いことか。もちろん、そんな理想なんかどうでもいいとお思いの方もおいでと思いますが、各大会や練習試合等のベンチからの指示の内容やタイミングを見聞きする度に、多くの方が「子どもを中心に考える指導」を心がけて下さっているのがよくわかります。

委員長通信No.6にも書きましたが、4種委員会の各クラブには「小学校の部活」を引き継いだ、保護者や地域の方々の「子ども達がサッカーを楽しむ場を存続させたいと願う」熱い気持ちや、脈々と受け継がれ今日に至っています。しかも子どもへの接し方や指導法を追究し進化しつつ。

4種委員会としましては、およそ20年前から、指導者が子どもへの接し方や指導法を学ぶ場として、サッカー教室(指導者講習会)を開催しておりますので、講習を受講された方は市内に延べ1000人はいりません。

サッカー教室(指導者講習会)で大切にしている「子どもを中心に考える指導」の根幹は、大人の考えを押し付けるのではなく、子どもに自分で考えさせることにありますが、このコンセプトの下、何らかの学習をした指導者の方々が、各チームに述べ25名はいることとなります。また、さ

らに上級を目指し、C級ライセンスを取得した方も多数おいでです。

「理想的な姿」に賛同するしないにかかわらず、子ども達のために「子どもを中心に考える指導」を学び、その後も勉強をし続けている方が各クラブに必ずいることが市川市の強みであり、各単独チームの指導の充実という、現在の状況を作りだしている要因の一つだと思います。

さて、ここで指導の充実を実践している指導者に視点を替えます。現在、市川市の4種委員会の指導者はほとんどがボランティアで活動しています。市川市の4種委員会には、株式会社等の営利を目的としたクラブは所属していませんので、所謂子どもにサッカーを教えることを生業としている人はいません。

指導者の人件費がかからないため、各クラブはクラブの運営を必要最低限に抑えた運営費で賄うことができ、その結果、子ども達は（子どもの保護者が）比較的廉価な月会費等を納めることで、サッカーを楽しむことができます。このことは、「理想的な姿」を支える金銭面の要因ともなっています。

しかし、一つ心配なことがあります。それは、日本ではボランティアの指導者というと、それだけで営利を目的としたクラブの指導者より劣っていると思われがちなことです。逆に言うと営利を目的としたクラブの指導者というだけで、優れた指導をすると思われがちです。その道のプロということで…。比較的高額な月会費等を納める営利を目的としたクラブに子どもが流れ、そればかりになってしまったら、どうになってしまうのでしょうか。子ども達にとって良くない状況になってしまうのは間違いありません。

市川市FC（市川トレセン）が毎年遠征しているドイツ・バイエルン州ではどうでしょうか。

まず、費用の点では、4種委員会の少年のカテゴリーはまず無料です。子どもがお金を払ってサッカーをするという発想がまずありません。どの子にもサッカーを楽しむ場所があり、大人が楽しませてあげるのは当たり前の事という感じです。

次に、指導者かというと、ほとんどがボランティアであり、市川市と変わりません。主に地域の方がライセンスを取得更新して子どもの指導に関わっているのは市川市と同じです。ライセンスの取得が一つの目安となっていますが、ほぼボランティアという点は変わりません。

営利を目的としたクラブはどうでしょうか。基本的にはバイエルン州サッカー協会に所属する公的な地域クラブが基本で、営利を目的としたクラブはまずありません。まして、日本のように、他国の有名プロチームのスクールやチームなどはあり得ません。

このことを皆さんはどうお考えですか？私は今の風潮を危惧します。営利を目的としたクラブには、それなりの魅力があるのでしょうか。プロの指導者ですから、それなりに上手くしてくれるのかもしれませんが。しかし、もし、貧富の差がサッカーの習得の差になるとしたら、高額のお金を払わなければより良い指導を受けられないとしたら、そのような国にサッカーの文化が定着するとは思えません。まして、そのような国がワールドカップで勝ち切るのは絶対に無理です。ワールドカップ優勝4回のドイツでは、少年は基本的に無料です。どれだけ底辺が広いことか。

一方、ボランティアの指導者の中に、「どうせボランティアだから」「お金はもらってないのだから」と、何の工夫もなしに頭ごなしの指導をしてサッカーを嫌いにさせ、やりたいように指導するからいやならやめてくれという指導者が増えているとしたら、これも、サッカーの文化が定着するとは思えません。ワールドカップ優勝4回のドイツの少年の指導者も市川市と同じようにほぼボランティアです。

「お金をもらっていないからこそ、ボランティアだからこそ、純粋に、子どもを中心に考える指導を徹底する。」どうでしょう皆さん。子ども達のために、この方向で進んでいきませんか？

市川の各単独チームの指導が充実してきた今。さらに一人ひとりの指導者が、ボランティア指導者としての気概を強く持ち、「子どもを中心に考える指導」を様々な角度から学び、無料と言いたいところですが、廉価な月謝であっても最高の指導が受けられる。そんな市川市にしていこうではありませんか。

「いやあ、石原さん。そういう気持ちで前からやってるよ。」もちろん、こんな声も聞こえてきそうです。